

心の居場所を無くし、 孤独に生きる現代の子どもたちを救え。

1999年に活動を開始したNPO法人 チャイルドライン支援センターは、2010年12月現在、43都道府県71団体が活動を展開している。友だち関係、いじめ、虐待、性の悩み、あるいは話し相手として、多様な子どもの声に寄り添ってきたチャイルドラインはさらに活動強化のための事業を開始した。

心に不安を抱える子どもたちからの電話は
年間24万7,000件に及ぶ。

チャイルドラインは、18歳以下の子どもなら誰でも電話をかけられる子ども専用電話だ。受け手は子どもをリラックスさせ、話を促すだけでお説教や押しつけは一切

言わない。それだけでも、「親」や「先生」には言えなかった悩みや不安を口にして、多くの子どもたちが救われている。

NPO法人 チャイルドライン支援センター事務局次長で事業本部長の林大介さんは、その効果について次のように語る。

「電話では顔は見えませんが、メールなどとは違って相手の息づかいなどは伝わります。そこで自分の気持ちや悩みについて話すことで、心を解放したり、感情を整理したり、自身の気持ちを整理したりしているのです。また、なんとなく誰かとつながっていたいという子どもたちもいます。チャイルドラインを使うことで、またもう一度課題と向き合おうという気持ちも生まれてくるのです」



作成したポスター



名刺サイズの告知カードも配布している



子どもからの電話を受けるスタッフ

2009年度に、全国統一のフリーダイヤル番号を設置したこともあり、2010年度の電話件数は247,282件に及んだ。着信してつながった電話のうち、56.4%が男子、39.2%が女子だった。年齢別では未就学児童が0.3%、小学生が19.1%、中学生が17.2%、高校生が33.0%、不明30.5%だといふ。高校生が多いのは、長引く不況で就職の内定がもらえないという社会的事情もあるようだ。

また、最近の相談内容として特徴的なことは『生きていてもしょうがない』と考える子どもたちがとても多いという事だ。虐待やいじめなどにあえば、自己肯定感が損なわれてしまう。親や先生の何気ない一言で傷つき、相談することもできなくなった子どもたちもいる。両親の離婚におびえる子どももいる。

チャイルドラインを活用した子どもたちの声の一部を紹介する。

『安心できて心がホっとした』

『どこの誰かわからないけれど、電話でつながっているんだ。1人じゃないって思えた』

今の子どもたちの身近に相談できる大人がいないこともその声は物語っている。

10人に3人が応対を受けられないという現状。

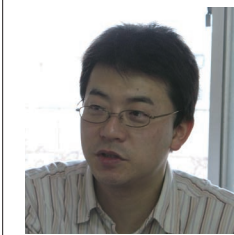
ニーズはますます高まるチャイルドラインだが、大きな課題が2つある。

現在128回線でフリーダイヤルを受け付けているが、話し中になることも多く、着信率は31.8%、最終的に一人の子どもとつながるのは、72%に過ぎない。10人に3人の子どもの話を聞いてあげられないということになる。このつながった率を90%台まで引き上げるということが、1つめの課題である。

「そのためには回線数と電話の受け手を増やすことが必要です」(林さん)

90%台を確保するためには、年間で30万円強のフリーダイヤル運営経費が必要だ。また、全国に1,700人いる電

担当者より



子どもの心の居場所を
用意するのは
大人の責任。

NPO法人
チャイルドライン支援センター
事務局次長 事業本部長
林大介さん

昔であれば地域社会で対応できたことが、構造変化によって子どもたちから心の居場所を奪ってしまいました。大人がもっと真剣に考えてあげなくてはならないことです。その現状にあってAJOSCには2年連続で助成を受け、たいへん心強く思っております。

話の受け手、600人いる支え手も2割ほど増やさなくてはならない。この受け手は全員ボランティアだが、誰もが受け手としての資質をもっているわけではないため、スキルアップをはかるための研修が必要になる。

また相手が子どもであっても、その対応にはかなり神経を使う。精神的なダメージを受け手が負うこともあり、モチベーションの維持にも配慮しなくてはならない。このため、同センターでは各エリアで会議や研修を定期的に行っている。

もう一つの課題は、チャイルドラインそのものの存在を知らしめる啓発活動である。昨年AJOSCの助成も受けて、名刺大の告知カードを1,000万枚作り、全国の小・中・高各校に配布したが、今年は新たに全国共通のリーフレットを作成した。さらに、子どもに人気のモデルを使ったポスターも作り、より身近な存在としてPRを行った。AJOSCはこれらに対する助成を行い、活動は電話件数の拡大としての成果を取めた。

今後も継続して活動を続けていけるよう、財政基盤の強化とマンパワーの充実という双方の努力が求められている。